

90年代文学評価の視角

— '97中国新時期文学対話会印象記 —

釜屋 修

【開催までの経緯】

猛暑と台風に送られての北京入りは不安なものであった。日中双方の「当代文学研究会」で合同の新時期文学の討論会を開催しよう、という話は、日本中国当代文学研究会の十周年記念活動の一つとして企画され、1993年北京滞在中の小生が王中忱(当時社会科学出版社、現清華大学中文系)、白燁(社会科学出版社・中国当代文学研究会副会長)二氏と話しあったのがスタートであった。その後、日本側では例会等にシンポジウムをにらんだ活動を企画し、緩慢ではあったが準備を開始した。1995年秋、別の学会で北京を訪れた際白氏と連絡、96年夏、中国で開催との希望を伝えた。その時、白氏から、「先鋒文学」「新写実小説」「女性文学」「新市民小説」等の交流テーマの提起があり、日本側でも検討することになった。岩手大学に赴任された王氏を通して中国当代文学研究会とさらに交渉を続けた。その後、中国側の意向として、96年開催は間にあわない、97年8月下旬に北京で開催したいとの連絡があり、それを受けて97年1月から討論内容、規模その他について具体的な打ちあわせが本格化した。重複や視乱を避けるため、交渉は、全体を〈釜屋—白燁〉、生活・経費問題は〈塩旗—郝榕(中国当代文学研究会常務副秘書長)〉と定めた。3月中国当代文学研究会の常務副会長張炯氏一行が来日、いくつか確認を行い、名称も中国側提案の「中国新時期文学対話会」を受けて決定した。日本側は実行委員会で参加者・報告者の確定、一部報告者の予備報告、検討等を行うとともに日程その他の詰めに入った。中国側主催団体については、最初中国当代文学研究会と社会科学院文学研究所の名があげられたが、その後中国当代文学研究会、首都師範大学(元北京師範学院)中文系に変更、それに清華大学中文系が加わり、三団体となった。勿論、その間の詳しい事情は日本側にはわからなかった。また、われわれの側からは、一般観光行事はなしにして作家との懇談の機会を設けてほしいこと、われわれが交流したい学者・研究者を招請してほしいことを要望し、大会参加費・宿舎・経費問題等についても最終交渉に入った。日本側の参加者・報告者・報告テーマ、日程に関する希望を提出し、中国側の参加著・報告者についての資料を要求した。しかし、6月段階で中国側はまだスケジュールが確定できない、一日目は80年代文学、二日目は90年代文学でどうかといった漠然とした案が示されたただけだった。7月5日付で招待状が届き、結局、その後も中国側の日程・資料の提示はなく、「開幕式はできるだけ簡素に」「研究発表は日中ほぼ

同数に「作家との懇談」「清華大学図書館参観」等の日本側の事前希望だけを頼りに出発することとなった。日本とはシンポジウム等の開催慣行も異なるし、中国側には固有の事情があること、重々承知していたつもりではあったが、さすがに不安と同席のままの出発であった。出発数日前は、ファックスも先方が受信停止状態になっていることがしばしばだった。成田出発組の北京到着には白、王、鄭各氏が出迎えてくれ、宿舎嶺南飯店に入って、小生の部屋ではじめて中国側が用意した日程(案)を渡された。われわれが提出していた希望がかなりとりいれられていたことはうれしいことであった。ただ、中国側の研究発表が予想をはるかに上回る数で、その分だけ日程は過密なものとなっていた。中国側も「希望者が多く、整理できなかった。遠くから来てくれる人、外部の人を優先したため、中国当代文学研究会の主要メンバーはすべて書面発表にするしかなかった」と苦衷を語っていた。前日日本を襲った台風13号が上海を直撃、関西空港出発組の到着は大幅に遅れ、深夜となった。運転手が数時間も空港で待機してくれ、到着後はホテル近くの「个体戸餐館」から「夜宵」が届くよう、中国側が手配してくれた。

対話会の日程、書面発表を含む報告者の氏名、論題、対話会終了後の活動等の全体については、本号『中国新时期文学対話会』の記録を参照されたい。ともあれ、中国主催三団体の関係者各位のたいへんなご苦勞と生活面でいろいろ世話してくださった首都師範大学の方々、日本側実行委員、参加者・報告者には心からお礼申しあげます。また、『季刊中国現代小説』からの「友情」参加にはおおいに励まされたこと、あらためて感謝する。なお、実行委員の加藤、佐藤、阪本さんらにご苦勞願って、日本中国当代文学研究会の活動と会員の既発表論文をまとめた冊子『不怕慢，只怕站』（B5判210ページ/日本語、一部中国語訳）を作成、中国側参加者に配布した。

【中国側報告の概要】（以下、「概要」「印象」の二章のみ敬称略）

二日間にわたる中国側報告者は20人、書面報告は10人であった。参加者は、北京、南京、天津、武漢、西安、済南、太原、南寧等各地の研究者約40人。上海の王曉明、作家の王蒙両氏は直前に都合が悪くなった。中国の大学院生、社会科学院留学中のハイデルベルヒ大学の女性研究者の参加もあった。（報告者氏名の前に*をつけたものは書面報告）

① 「新时期文学対話会」と銘打っただけに、中国側の報告は80、90年代の文学の状況について触れたものが多かった。「改革・開放」に伴う社会環境の変化と文学・文化のあり方、90年代の文学の評価(性格)をめぐる「新时期文学」か「新时期」文学かという論題で経緯を整理した蔣守謙報告が口切りとなった。詩歌について論じた謝

冕、*楊匡漢、*吳思敬、「ポスト先鋒」「ポスト新時期」「晩生代」「新状態」文学についての見解を示した陳曉明、張頤武、孟繁華、於可訓、王干、*楊匡漢らの報告は、80から90年代の文学動向の総体的把握についての、複雑微妙にくいちがった多様な見解のオン・パレードであった。一方、具体作の分析を通して90年代における「尋根文学」の進展、深化を解明しようとしたのは、張志忠であった。

② 個別テーマももちろん新時期に密着したものが多かった。陳駿涛は文学批評の動向を要約し、「女性文学」では戴錦華、金燕玉、長篇小説・「現実主義」・「現実主義衝撃波」では吳秉傑、「衝撃波」の命名者*雷達、*白燁、張志忠、王干、曾鎮南、歴史題材小説では韓瑞亭、新時期文学と宗教と題した季紅真、「都市小説」を論じた胡平、陳忠実や中西部作家群の肖雲儒、『廢都』の性愛描写を分析した*郝琮、「探求者」と吳文化の徐采石、「当代漢語散文」研究の*劉錫慶、「影視文学」の*張徳祥、「話劇」の「中国学派」(とくに「人芸」)を論じた*顧驥、ウロルトの狩獵文学の*吳重陽と、きわめて多彩多様であった。逝去が惜しまれる汪曾祺については、*劉錫誠が個人的交流の回想を含めて報告、一貫して知識人のあり方を追究している謝泳は西南聯大時代の汪、穆旦の「文学道路」をとりあげた。詩については、*楊匡漢や*吳思敬らが触れた「現代漢語詩」の意義や問題点が興味深かった。それは、佐藤普美子の要望があって、訪中前に連絡し、対話会の後、清華大学の藍棣之、王中忱に案内してもらって清華大学宿舍の自宅を訪ねた鄭敏が、「漢語現代詩」、漢語の特質、リズムやその詩作への活用の重要性について、年齢を感じさせない熱い口調で語った時の強い印象とも重なっているからかもしれない。

③ 時間節約を旨として中国語を「公用語」とした今回の対話会であったが、猛烈に過酷なスケジュールの中での緊張持続の難しさ、限られた時間内に予定した内容を語り尽くそうとする報告者の早口を正確に聞きとることの難しさを思い知らされた。勢い、帰国後にあらためてじっくり報告書を見直すことにならざるをえなかった。しかし、レジュメを用意してこなかった人(売れっ子に多かった?)、あまりにも簡単に過ぎるレジュメ(作品リストだけのもの等)などは、委細をくまなく再現する術もない。その点はあらかじめご了解いただくことにして、以下、あくまで個人の責任において、シンポ報告に限定して感じた問題点を、印象風書きとどめておく。

本稿執筆中、王中忱を介して白燁から中国当代文学研究会の『当代文学研究——資料与信息』数号分が送られてきた。1997年5期(10月20日)に対話会の記事、蔣守謙、謝冕、胡平、於可訓報告とともに松浦恒雄、藤重典子、塩旗伸一郎、下出宣子、飯塚容の報告が掲載されている。6期(12月20日)には楊匡漢、98年1期(98年2

月20日)には張頤武、吳思敬報告が掲載されていることを付記しておく。

【諸報告の印象】

中国側報告者の多くが問題にしたのは、80年代、90年代の総括、評価の問題であった。脚下の「改革・開放」の急激な進展、頭上の「全球化」・世紀の交替期という環境にある以上、ある程度は予想していたが、中国人研究者の焦点の絞り方は、われわれが予想したよりもはるかに強烈であった。この確認も収穫であった。いや、予想外と思う私の認識がズレていたのだ。市民的欲望の解禁、生活向上希求の新保守主義、貧富格差拡大の矛盾、社会と人心の通俗化、腐敗・犯罪の増大、政治的自由の制限、全民規模民主主義の未成熟等の状況がつけつける緊張、文化の危機意識は深刻なのである。80年代に何を見、90年代に至る政治・経済・社会の変化の中で、文化は、文学は何を継承・発展させ(連続)、何を否定し何を創出したのか(非連続)。80年代新時期文学の生成・成長の過程についての総体評価では、各時期の個別の傾向・現象についての個人的な好悪を別にすれば、日本側をも含めて、全報告者・参加者に大きな認識差異はないであろう。しかし、80年代末から90年代の今日まで(以下、90年代という概念にまとめる)に至る複雑な変化についての評価となると、文学的達成とそれをよくも悪くも可能にした社会基盤についての見方が、あるいは両者の関係についての見方が、くいちがってくる。蔣が会の冒頭で報告した、「新時期文学」か「新時期」文学か、という問題は、単なる言葉の遊びではなかった。後者の見解に立つ者は、89年以来、92年10月の中共14回大会を経て、90年代文学に「21世紀文学」「ポスト新時期文学」「転型期文学」「新状態文学」といった呼称を与え、その根拠を示してきた(曾鎮南、吳野、張頤武、陳美蘭ら)。蔣はこうした見解に対し、90年代文学の「周縁化・閑適化・通俗化・调侃化・私人化」の傾向の事実を認めつつ、同時に80年代の特質を継承した崇高な主題を追究した作品群の存在(方方、鉄凝ら6人の作品)を指摘、錢鍾書の「唐有“宋音”、宋有“唐音”」の説を引きながら、社会環境は変化して文学は「新時期」の環境下におかれてはいるが、文学としての美的風貌はなお「新時期文学」のカテゴリーで概括しようとした。90年代の変化を論じて、立脚点、視角は論者により異なる。専ら詩の状況に限定したと思われるが、謝冕報告は、80年代を90年代よりも高く評価する。80年代は、詩人が文革モデルに挑戦しつつ、空前の情熱を燃やし、「想像力」と「使命感」をもって創造に参加した「狂飲節」、カーニヴァルであったとする。しかし、80年代後半から90年代に入ると、詩人の力は徐々に衰微し、やがて詩は「言説多而実効少」となり、「浮華(華やかではあるが上っ調子)」や「喧囂(かまびすしさ)」が詩の繁栄を阻んだ、と見る。そして83年から登場し、89年山海関

近くで鉄道自殺した「詩歌烈士」海子を「一瞬空をよぎる彗星」、民族と人類の結合、詩と真理の合一、「大詩」を志した詩人と激賞。その死は、中国の理想主義者の喪失、中国現代詩の悲劇の隠喩とする。海子以後、90年代は、人心を揺るがす事件もなく、「狂熱期」は終焉し「沈寂期」に入ったとする(楊匡漢はこれを落ち着き、前進と評価する)。もっとも、謝冕は、90年代の「進歩」も認めている。「個人化」が、詩人を「社会の代言人・上帝・教師・人格典範」といった身分から本来の詩人に「揚棄」し、詩を詩人の手にとり戻す役割を果たしたことは疑いないとする。そして謝は、世俗と物欲が織りなす風の中で一点の理想の火花がまだ消えていない例として、「学院派」詩人たちの「知識分子精神」「新的文化復興」のよびかけをあげて論をくくる。ここには、80年代の鮮烈な実験、輝かしい才能の開花への激しい思い入れがある。80年代新時期文学の成果の上に、90年代に新しい批判力量を構築したいという、詩人謝冕自身の熱い思いが噴出している。

謝冕、蔣守謙よりも若い世代の研究者たちの見解は異なってくる。かつての「先鋒派」や「新写実派」に対置される90年代の新しい書き手について、陳曉明は「新状態」・晩生代・新生代・60年代生まれ・新生存主義などの多様な命名の中から、相対的にふさわしい呼称として「晩生代」を選び、彼らの時代と向きあった姿勢を「現在主義」とし、文学の新機軸創出の可能性の鍵は、作家が激変する「現在」と向きあえるか否かにある、とする。彼らは歴史や文学史と向きあうのではなく(したがってどこかの流派や何かの理論範疇に線引きされることなく)、自分自身が身を置く現代社会・現在と向きあい、リアリズム、モダニズム、ポスト・モダニズム等の諸要素を高度にミックスし、自己の感性を頼りにモザイク様式で非日常的景観を叙述する、という。これとは別に、張頤武は「ポスト新時期」文学の顕著な傾向を3点にまとめる。(イ)「五四」以来の「国家・民族・個の主体」等のアレゴリーからの解放を勝ちとった「反寓言」文学(89年の王朔から王蒙の『恋愛的季節』等)、(ロ)自己の眼前に展開される「状態」に直接斬りこみ、自らの感受性、体験、思索を時代の文化的コンテクストの表象とないまぜていく、新しい「表意策略」としての「新状態」小説。大衆メディアの支配、消費文化中心の「文化新空間」では、作者はもはや渦の外側から「反思・観察・探索」する術はなく、作者自身が状態の一部であり、内在化した視点で現在を表現していくしかない、とする(何頓、韓東、林白、徐坤らとともに劉心武、王安憶の名があげられる)。(ハ)「社群文学」。「社群」とはもともと社会学的概念で、同一地域に生活する、共同意識と共通の利害関係をもつ社会グループで、血縁を離脱した公共の構造空間であるとする。この傾向は、(a)社会の基層部に着目し、数年来の経済改革がもたらした社会の構造的変化を描き、(b)公共性・公共生活の不可欠性を重視し、新

しい環境下での国家・社会・個人の複雑な関係とその中の公共価値(公平・互助)を表現する、(c)「社群意識」(発展の成果は全人民が享受すべき)による「情感空間」の構築をよびかけ、(d)新しい道徳・倫理の選択を提示する。彼らを「伝統的な“社会主義”的色彩の濃い」「人びとから注目を浴びた潮流」とする(談歌、関仁山、何申ら)。大胆に言えば、同じく新時期文学の90年代の変化を凝視しながらも、張頤武は新傾向を称賛し、陳曉明には留保がある。陳は、既述の如く「現在」と向きあい、歴史や文学にではなく「現在」に発言する「晩生代」を高く評価しつつも、以下のような欠落を指摘する。それはまさに彼らの優点と表裏一体をなしているもののように思える。陳の整理によれば、(イ)深く複雑な思想意識、歴史意識に欠け、「歴史」と「現在」の多元的対立関係の中で叙述を行う力がない、(ロ)過度の「個人化」「私人化」が現状把握を狭隘にし、深さと広がり度で現在を表現できない、(ハ)若い世代の、非・常態的生活表現への過度の集中・雷同は、手法の独自性を、誰もが使う普遍的方法に拡散させてしまった、ということになる。この点では、「都市小説」や「言情小説」をとりあげて胡平も「文化批判の力量の欠如」を指摘し、王干は、文学はさまざまな管理の網の目から脱出して創作と発表の自由を獲得、活性化したが、作品・隊伍の数的増加が質の向上にはつながらず、逆に「文学の泡沫化・商品化」を推進したと指摘している。さて、張が、報告の冒頭で引いた徐坤の『熱狗』の情景描写(おそらくは実在の社会科学院あたり)は、たしかにおもしろい。それを張が、インテリジェンスとディスクルの「権威空間」が神聖性を失い、自己閉鎖的な狭小なものに変わった、燦爛たるポスト・モダンの迷宮が昔日の枢軸点を淹没させた、という心象風景に読みとるのも、おもしろい。しかし、「反寓言」「新状態」「社群」文学を一つの皿に盛りつけてみると、前二者は現状あり姿の分析、描写に過ぎず、「社群」意識がそれらに方向性を与えている。そして全体をきらびやかなポスト・モダン言辭が統括しているのではないか。92年春、「姓は『社』か『資』か」論争に決着がつけられて以来、この問題の正面からの再提起はタブーであろう。さらに、その後の市場経済原理の本格導入、民衆の生活向上への手触り等を考慮にいれば、改革の現状、とりわけ矛盾や危惧にどういう立場からどう発言するか、困難な課題である。旗幟鮮明とはいかぬもどかしさと苦衷の中からの発言、逆に「反××」を掲げた以上はストレートに「××」的とはいかないネオ××、さまざまな言説が複雑微妙に拮抗するのは、容易に想像できる。

詩の現状評価をめぐっても、さまざまな論議があるようである。ひとり謝冕報告だけではなく、対話会の前に武夷山で開かれた第一回現代漢語詩学術討論会でも激烈で有意義な討論がなされたということであるが、詩については勉強不足でこれ以上の発言権をもたない。では小説はどうか。ここ数年長篇ブームだと言われる。白

燁は、90年代前半で400部余りであった長篇が、指導部門の組織的提唱、作家自身の努力、出版側の積極的協力に商業資本の文学事業への介入、通俗文学の長篇ジャンルへの進出等が加わり、作家協会系列の95-96年度計画では620部、1997年度推計では700部を超えたと報告した。中でも「現実主義」の復調が一つの話題である。その一部の作品群の共通性をとらえて「現実主義衝撃波」の名を冠したのは雷達であった(1996年6月)。国营の大、中企業や私企業の改革の実態を描いた劉醒龍や談歌らの作品である。現在進行中の経済改革を核心として、新しい社会矛盾、生存の実態、苦境脱出の艱難辛苦等をなんの虚飾もなく描き出した作品群を指したものである(楊匡漢はそれらに冠された名称として「生存現実主義」「体験現実主義」「心理現実主義」「現代現実主義」をあげている)。それらの作品は、「無距離の真実」という点で「新写実主義」に通底しつつ、原生态描写、小人物・小家庭の「生存劇」だけに満足せず、「経邦濟世」「国計民生」の行方に着眼し、伝統的「現実主義」、80年代前期の作風を彷彿させる、久しぶりの作風の復活とする。雷のこの指摘は、ある意味で、前述の張の「社群」文学の輪郭と重複する。これらに、曾鎮南がとりあげた長篇(周梅森『人間正道』、張宏奎『車間主任』、鄧一光『我是太陽』等と路遥、陳忠実らを加えた12篇)、韓瑞亭が報告した「歴史小説」(姚雪垠『李自成』、穆陶『林則徐』、二月河『雍正帝』等)を加えれば、「ブーム」の輪郭が浮かびあがる。しかし、かつての先鋒派、尋根派、新写実主義等の作家のその後の動向についての評論は、張志忠のみであった。(内容までを詳細に論じたものではないが、白燁が「当前的長篇小説」の中で例示する作品リストは興味深い)。張志忠は、韓少功の『爸爸』から『馬橋詞典』への、王安憶の『小鮑莊』から『長恨歌』への、それぞれの作家的成長、作風の成熟を述べた。彼らは、80年代には、マルケスやフォークナーから学びながらも、十分には消化できなかった、その苦闘の上に、90年代にはより深化した視角から民族文化への探求に成功した、そこには「ルーツ探し文学」の、90年代への脈々たる「連続」が確認される、とする。そうした流れは、賈平凹の『廢都』、陳忠実の『白鹿原』、高行健の『最後一個匈奴』といった作品にも貫かれている、と張志忠は見ている。

なお、前述の白報告は、かつての先鋒作家の動向にもかなりの目配りをしているし、楊匡漢の「九十年代中国文学風景綫」は、論述の個々の判断についての賛否を別にすれば、総括性が高く、全体的動向理解の一助となろう。

女性文学については、既述の報告以外、先の楊報告もすこしく触れている。90年代の重要なジャンルではあるが、まことに不勉強、残念ながら紹介はご寛恕願う。

批評の現状と問題点については、対話会の諸報告自体からその一端を窺うべきであろう。ただ、唯一批評問題を論じた陳駿涛報告には触れておきたい。陳は、建国

以来の批評の歴史をふり返り、80年代に入ってはじめて独立した品格・地位・科学分野として確立した、とする。批評は、社会・政治・主流イデオロギーにかかわることを免れえないが、その具体任務を担う従属物ではなく、社会の進歩と文学の発展のために一臂の力を貸すもの、「歴史批評」「文化批評」「構神分析批評」「構造主義批評」「文体形式批評」「比較文学批評」等の批評スタイルが、まだ異なった学派の形成までには至らなかったし、西洋的諸観念のとりこみに「過快、過急、過雑」であったり、批評の民族的伝統や読者の受容を無視した等の不十分さをもちながらも、多元構造を作りだしたのは80年代であった、しかし、90年代の「商業大潮」は、文芸批評を、炉端にくすぶり、いびられる「灰姑娘」の位置に追いやった、「日西山に薄(せま)り」使命感・目標感を失ったという。商品という怪物が至るところに入りこんで来た以上、もはや身を隠す場所とてない。90年代文芸批評に変化が生じるのもやむをえない。90年代は、80年代に形成された批評の多元構造を、いっそう促進し、(イ)党や政府の文芸方針をPRする「服务型」、(ロ)非従属的、独立科学としての「科学型」、(ハ)審美、鑑賞活動を重視する「審美・鑑賞型」等が、共存したものとなった。そして「商品化・市場化」は文学の商品化とともに批評の商品化をも招来し、「炒作」(ちょうちん持ち批評)や「有償批評」(原稿料とは別の報酬付き)も生まれ、批評のオリジナリティは衰微し、「平面化」「凡俗化」が進んだ、とする。会場の若手研究者から90年代批評の「全般否定」かとの声もでたが、陳は、文芸批評の現状と未来にまったく悲観的になっているのではない。今もなお、批評界には「強大な声」が鳴り響いているのではないか、と。問題は、「強大な声」の質、中身まで論じなければならないところにある。それは、「理想」「崇高性」「批判力量」「人文精神」等々にまつわる事情と同じである。概念の抽象性・暗示性が高いため、両義解釈が避けられない。同じ言辞を用い、時には「××空間」などという一見ポスト・モダニズム的立場をほのめかす用語で表明されるが、概念や意義は、論者のコンテキストの中で見極めるしかない。そして、80年代知識人・学生の体制外からの批判的刺激が消失し、海外に散逸したり、体制内部で沈潜したり、体制側にとりこまれたり、という現状が、言説の両義性をより複雑怪奇、不透明にしているのである。そして、外国人であるわれわれがそうした晦渋にとまどう以上に、中国の良心の苦悩は深いであろう。

【作家との懇談】

8月22日午前、作家たちが会場に現れた。周而復、劉毅然、吳濱、余華の各氏とは4年ぶりの再会だった。周氏とは三度め、20代半ばに大阪で短い時間通訳をつとめたことがあった。その三回とも氏は背広姿であった。他の三氏は前回同様、ラフ

なスタイル。劉恒氏と馬瑞芳、林白、徐坤、陳染の四人の女性作家とは初対面であった。30人の日本人研究者と9人の中国作家が向きあったのは初めてであろう。到着後に渡されていたリストのうち、王蒙(海外から帰国直後)、陳建功、劉震雲、邱華棟四氏が都合で欠席となった。日本側が希望していた他の作家のうち、莫言氏は山東へ、張抗抗氏は新疆へ出かけて、格非氏は勤務する大学で所用があって参加不能と、到着後に説明を受けていた。

最初に白燁氏が作家を紹介してくれた。その後、各氏が近況報告。『上海の朝』の周氏は今や長老、全6巻300万余字の最新作『長城万里関』について語った後、周恩来の伝記については小説、散文等は多数あるが、私は韻文で書いている、全四部、98年に第二部出版予定等と話した(今年1月、『長篇叙事詩・偉人周恩来・第一部』中央文献社を受贈。第一部は551ページ、77年着手、94年末三稿とある)。94年胡風展でお会いした時同様、かくしゃく。劉恒氏は、ただ一人つけペンで書く人とどこかで読んだことがあるが、農民的風貌の大柄な人。小説を書いても誰にも注目されないし、出版社も歓迎してくれないので、ここ数年は張芸謀と合作したりシナリオを書いている、シナリオライターの地位は低いし、やめろという人もいるが、映画を見た人が小説に戻ってくる、でも私にとっては、シナリオは副業で、ほんとうの仕事はやはり小説、いずれ小説に全精力を注ぐ、4代になると20代の頃の文学的激情はない、それだけに自分で満足できるものを書きたい、社会への影響では政治力・経済力が大きく、文学の地位は低い、作家は今試練を受けている、等々と話した。吳濱氏は、「城市文学」で著名だが、やはりここ数年書いておらず、目下大象文化集団を率いる「実業家」である。対話会終了後に、何人かの旧知の人と集まった時には、氏自身が運転する「北京吉普車」に乗せてもらったが、食事しながらの文学談義・世相談義では相変わらず意気軒昂だった。馬瑞芳さんは吳氏の山東大学中文系時代の恩師にあたる。劉毅然氏は、93年小生が高熱で倒れた折、王中忱氏とともに病院に運んでくれ、手厚く看護してくれた人である。勤務校であった解放軍芸術学院(氏は映像文化論担当だったはず)をやめ、「個体作家」になったという。40歳をすぎ、作家は制約から抜けだした状態にいるべきだ、茅盾、郁達夫らのものを映画化、TVドラマ化したりしたが、伝統のいいものを若い世代に見せる、見た人が後で図書館へ行って本を読んでくれる、小説は目下長篇を書いている、今までと違った視角、ちがった手法で、等々と、いつもながらハンサムで、頬を染めるように語ってくれた。余華氏、前回会った時はまだ上海近郊の嘉興に住んでいたが、今回は夫人のいる北京へ移り、「自由撰写人」となっていた。前回の、Tシャツ、きかん気の腕白風印象は残ってはいるが、同じくTシャツでも、今は凛々しい。もうすぐ40歳、今はじっくり

読書をしたい、魯迅の作品はやはり偉大、短いけれど私たちはかなわない、一人の作家が大量のものを書いていったいどうするのか、精力の消耗だ、小説をたくさん書くのは有害だと思ふようになった、と厳しい顔だった。林白さんは、純白の、広い襟ぐりに大きなボタンのブラウス、昨年(96)4月からは、あまり外とつきあわず、ほとんど家にいることが多く、今年3月からまた書きはじめている、気分はのんびり、比較的自由だ、と、今や女性文学の新進気鋭はことば少な。馬瑞芳女史はダークグリーン地に白い水玉のワンピースで貫禄、山東大学教授、古典文学研究者でアメリカ、日本で講義もしている。小説では、80年代の「校園生活」を描いたもので有名、散文家でもある。ここ数年の大学の変化を反映した長篇小説を書いているがまだ未完成、と。徐坤さんは真っ赤なシャツ、めがねをかけふっくらと若い。社会科学院亜太研究所研究員だったせいか、アラブ、インド、日本等アジアの知識が豊富のようで、日本については、川端康成、「もののあはれ」といったことばや、漢字仮名まじり文の魅力等の話もでた。職場は、その後、当代文学研究室に移ったという。陳染さんは、小柄でショートヘアー(馬さんのパーマを除けば三人はみなそうであるが)、白いブラウス。車の渋滞で遅刻。女性文学の新星、「辺縁心理」が得意、ここ一年ばかり胃が悪く、体調を崩しているのので休んで、本を読み、落ち着いた自由な生活を望んでいる、好きな作家にボルヘス、ジョイス、カフカ…日本の作家は名前がでない…と、もの静かに語った。

日本側から四人が質問。(イ)宮尾正樹氏が最近の執筆状況を、(ロ)宇野木洋氏が商品経済等の影響について、(ハ)下出鉄男氏が「禁区」の有無を、(ニ)栗山千香子さんが文学的出発点、文学の道を選ばなかったらどんな道を選んでいたと思うか、と。(イ)に関しては、私は一年書いていないが、四年の人がいると、余華氏が言い、みんなから押しつけられた形で劉恒氏が答えた。書かない主な原因は政治状況、89年の政治「動乱」の衝撃があった、いろんな見方ができるだろうが、いずれにしろ人心に大きな影響を与えた、そこへ経済大改革、作家は大きな矛盾の中にほうりこまれ、とても疲れた、出版社もしょっちゅう追いかけてくるし…と率直な答えでうれしかった。(ロ)に答えたのは、あけっぴろげな若い徐さん、私が93年にももの書き始めた時には、もう「文人下海」等終わっていた、……これからは作家協会の作家でなくても、いい作品であれば「書商」を通して本をだせる……等、「晩生代」らしい。(ハ)は、馬女史が、そんなにない、あるとすれば、「本能的禁区」と鮮やかにかわした。(ニ)にはひとりずつ答えたが、出発点について、小説を書けばいい生活が手に入る、有名になれる、カッコいい話をし、車に乗れる等、と答えた毅然、恒の二人の劉氏がおもしろかった。ほとんどの人が、「作家の道を歩んでいなければ」

の問いに、やはり作家になっていた、とする。もともと大学の教授だ、でもアメリカで牛肉入りギョウザを作ったら好評だったから、ギョウザ屋になる、と馬女史が笑いをとると、小説は、自己表現のいい方法、生活圧力のない、自由自在な生活がいい、読書と散歩の生活か金儲けか、となれば前者を選ぶ、ときまじめに答えたのは陳染さんだった。作家たちは、そのまま日本側の答礼宴(昼食、近くの玉都飯店)にも出てくれた。私のテーブルは、周而復、朱寨、張炯氏ら、朱氏が延安魯迅芸術学院出身とわかって、いろいろ聞きたかったが、この日はホスト側、叶わなかった。少し早めに帰る周氏を張炯氏らと送って玄関へ出ると、文化部の黒塗乗用車と運転手が待っていた。宴後、再会を祈りつつ作家たちと別れ、われわれは清華大学キャンパス、図書館見学に向かった。王干、余華氏らは、仲のよい若者らしくうちとけて、夜の行動(?)を相談していた。

【会後余語】

対話会が無事終了してホッとする。有志(大多数)で、北京大学中文系を訪問、交流。対話会参加の各氏以外に、費振剛主任、孫玉石、陳平原、曹文軒各氏、韓国外語大学の朴宰雨氏らが参加してくれた。昼食は、なつかしい勺園の2階のゲストルームでごちそうになり、孫氏の案内で、全員未名湖畔を散策した。98年に百周年を迎える準備もあるのか、北京大学の各施設は以前より充実していた。24日以降、日本側参加者は、帰国する人、留学先に戻る人、旅行その他各地へ出かける人等、さまざま。私は何人かの人と同じく、北京にとどまり、書店を廻り、旧知の友人を訪ねることにしていた。久しぶりにお訪ねした梅娘さん(孫嘉瑞。筆名は「没娘」と通音)宅には、カナダの出版社から一時帰国の長女の柳青さん、他の作家や孫家の友人たちも待っていてくれた。その中の一人の大型RVで少数民族料理店へ出かけ、歌や踊りを見ながらの食事、歓談となった。まもなく本が出るのよ、ということで、私もたいへんうれしかった。帰国後、『梅娘小説散文集』(張泉選編・張中行「序」・北京出版社1997. 8月刊629ページ)が送られてきた。4月から講読の授業で読んでいた短篇「行路難」、この新版では、きめ細かい字句の修正が行われていた。帰国前夜、友人に電話、いろんなことを夢中で話していて、気がついてみると、一時間が経過していた。そのあと、忙しい中を孫玉石氏が別れの挨拶に来てくださり、何人かの人といっしょに歓談。深夜、帰る孫氏をホテルの玄関まで送ると、夜風が北京の過ぎ行く夏の匂いをのせて頬に心地よかった。

一人の友人のことばが、脳裏をよぎる。私たちは、日本や日本の研究者、研究成果を「他者」としてしか扱っていなかったのではないか、これからは、そうではなく、

中国、日本を含む東アジア全体を視野にいられた研究、共同作業の必要が増えるのではないかと。われわれの中の中国もまた「他者」のみではありえないであろう。

なお、対話会については、ほかに、加藤三由紀さんの「中国新时期文学中日学者対話会あれこれ」(「中国文芸研究会会報」192号/97.10.26)、拙稿「新时期文学対話会を共催して」(「東方」204号/98.2)がある。

(1998. 4. 7)

®

作家报

ZUOJIABAO

山东省作家协会主办

社 长 马 恒 祥

总 编 辑 魏 绪 玉

1997年8月28日

(总第468期)

统一刊号CN37-0056

国内代号23-174

国外代号:4602D

文学风景这边独好

中日学者研讨中国新时期文学

本报讯 8月20日—22日,由中国当代文学研究会、日本中国当代文学研究会、首都师大中文系、清华大学中文系联合主办的“中国新时期文学中日学者对话会”在京举行。与会的30位日本学者和40位中国学者,就中国八十年代文学的进程与影响,九十年代文学的现状与走向等问题,展开了集中而深入的研讨。

与会的日本学者分别以孙犁、汪曾祺、史铁生、王安忆、贾平凹、格非等人的创作为重点,透视了中国新时期文学的深层次演变,认为与同时期的其他国家的文学相比,中国新时期文学具有更加鲜明的精神志向和民族魂魄,可谓“风景这边独好”。一些日本学者还指出,中国文学在八十年代后期遇到的商品化大潮的冲击,现已明显缓解,创作与批评两个方面正在走向常轨,这将给文学的更大发展带来好的契机。

与会的中国学者则从“长篇热”的新动向、新生代的崛起,女性写作的演进以及现实主义的流变等方面,论说了文学进入九十年代之后的种种变异。大家普遍认为,较之八十年代文学,九十年代文学更显示了文学的多元化探索和个性化追求,但在诗歌、小说领域,都有在一定程度上疏离时代精神的倾向,值得引起人们注意。一些学者还就“新时期”的提法、“新生代”的概念进行了梳理,有的学者还提出要关注七十年代出生的“晚新生代”作家群的创作。

对话会期间,周而复、刘恒、余华、刘毅然、吴滨、马瑞芳、陈染、林白、徐坤等中国作家应邀与会,就个人创作的动因、文学的商品化倾向和创作中有无禁忌等问题,回答了日本学者的提问,并分别简述了自己的创作近况。日本学者认为,同早已熟知了名字和作品的中国作家面对面地交流,增加了许多感性认识,对他们更深入地了解中国作家,更内在地研究中国文学都很有助益。

中日双方与会学者都认为,此次对话会,围绕着“中国新时期文学”进行对话研讨,彼此交流了信息,相互切磋了看法,对于中日双方文学研究者相互增进了解、取长补短,共同推进中国当代文学的研究事业,都有重要的意义。

日本学者与会并发言的有釜屋修、千野拓政、宇野木洋、加藤三由纪、渡边晴夫、下出宣子、松浦恒雄、藤重典子、盐旗伸一郎、栗山千香子、饭冢容等;中国学者与会并发言的有朱寨、张炯、谢冕、顾骥、刘锡诚、白烨、杨匡汉、陈骏涛、季红真、戴锦华、陈晓明、张颐武、王干、孟繁华、韩瑞亭、曾镇南、萧云儒、於可训、徐采石、谢泳、吴思敬等。(文武)